

令和元年度 厚生委員会行政視察報告書

厚生委員会

委員長 高 田 真 里

1 視察期間 令和元年11月8日(金)

2 視察先及び視察事項

(1) MUROYA

「障害者や高齢者の自立支援について」

(2) アルペンリハビリテーション病院

「回復期リハビリテーション病院における取組みについて」

(3) あしたねの森

「高齢者施設と保育施設および放課後デイサービスの一体化による効果について」

3 視察参加委員

委員長 高田 真里

副委員長 泉 英之

委 員 松井 邦人

〃 金井 毅俊

〃 大島 満

〃 松尾 茂

〃 橋本 雅雄

〃 鋪田 博紀

〃 高田 重信

4 随員職員

議事調査課副主幹（議事係長） 中山 崇

議事調査課主事 北山 栞

5 視察概要

MUROYA

(1) 視察事項

障害者や高齢者の自立支援について

(2) 視察の目的

障害者や高齢者の自立支援の一環として就労支援があるが、就労までに必要とされる支援が障害の程度などで異なり、仕事内容や職員のサポートなどの配慮が必要とされている。

そこで、MUROYAで行われている事業を視察し、本市の施策の参考とするもの。

(3) 取組みの概要

MUROYAは2018年6月にオープンした社会福祉法人アルペン会の新事業である。その最大の特徴は多機能型就労支援事業所であることで、野菜の切込みや調理加工、併設されているカフェでの接客などの仕事を最大2年間行うことができ、実社会に出る前の働く練習の場を提供している。就労移行支援終了後は、一般企業等への就職や、就労継続支援A型への移行となる。

同施設内に農園を整備しており、今後は収穫から加工、販売までの6次産業化を目指している。

(4) 所感

〔高田真里委員長〕

多機能型就労支援事業所として、身体・知的・精神・難病等の障害を抱えている方の職場復帰や再就職などで、「働きたい」のサポート（働く練習）をされている。

カフェの運営の中で、野菜の切込みや接客、販売、調理加工などを中心とした仕事内容になるが、その「働く」ということが自分自身の訓練のみならず、居場所としての安心感や、人の役に立つという満足感を生み、「生きるチカラ」となっているところが素晴らしい。

今後は6次産業化も前向きに検討されており、農作物の栽培もうまく運ぶよう期待している。

〔泉副委員長〕

MUROYAでは、障害者が社会復帰できるよう「働く練習」として、食事の下ごしらえやカフェでの接客を手始めに、就職に向けての活動をサポートしており、有償労働により、社会の一員として自立させようという取組みに感銘を受けた。

身体障害者や知的障害者は、働くことのできる分野が比較的明快にポジショニング可能だが、心の病を持った精神障害者は、人と接すること自体が過敏な立ち位置にあることから、周囲の大人たちにも繊細で思いやりのある指導が求められ、焦らず、慌てず、

ゆっくりと醸成する環境が必要なのだと理解した。

〔松井委員〕

MUROYAは、障害のある方の生きる力を引き出す場所として、野菜の切込みや運搬、調理加工、カフェでの接客や販売、クリーニングや清掃等を通じて、働くために必要な知識や訓練を行いながら居場所づくりを行っている。また、カフェを運営することにより、障害の有無や世代を超えた交流の場としても役立っていた。

また、リハビリ介護職員が障害のある方に合った可能な作業に分解して仕事をしてもらうことで、障害のある方の自信ややりがいにつながり、どんな仕事ができるのか見つけることにも役立っていた。

このような場所は共生社会を目指す上で、必要な事業だと考える。

〔金井委員〕

私が飲食店を経営していた際、社会福祉法人が運営している「ウォームワークやぶなみ」から卵を仕入れていたこと、また、調理人の立場からも、今回の視察は非常に関心が高かった。食材を洗い、皮をむくという同じ工程を、時間をかけて「自分のペースで仕事をする」ということで、私の仕事との違いは「スピード」だけだと思う。

提供されたランチの完成度は高く、見事だった。個人的には、切り損ねなどの残り食材は、サラダやスープ、カレーのルーになっているのではと思った。

〔大島委員〕

岩瀬という伝統ある街並みの中で、斬新で機能的な建物を出現させたことに、事業者としての並々ならぬ決意を感じる。名前も然り。

とにかく福祉に関連するものは、建物であれ内容であれ妥協しがちだが、この施設は、食の味や価格、デザインにおいて一般の店と同じテーブルで競争している。そうでなければ、甘えが出て生き残ることは困難であろうし、また、就労の支援にもならないであろう。

この事業と店舗が永続し、多くの就労支援者の雇用の機会が増すように期待したい。

〔松尾委員〕

社会との関わり、自分の居場所という安心感、そこから生きる力が生まれる。そして生活できなくては、人生は輝かないという考えで、障害のある方の「働きたい」をサポートするために開設し、就労に必要な知識の習得や訓練を行っている。野菜の切込みや調理などを行うワークスペースのほか、多くの人にとって生きる力を育てる、そしてつなげる場所として、重要な使命を担っていると感じた。

〔橋本委員〕

MUROYAは多機能型就労支援事業所である。障害のある方の就職や職場復帰をサポートする施設として昨年の春にオープンした。

初めて訪れ、まず目に付くのは施設の清潔さと明るさだ。さらに、木材がふんだんに使われている屋内スペースにはぬくもりが感じられる。

障害のある方が働きやすいようにさまざまな配慮もされており、生き生きと仕事をする姿が容易に想像できる。アルペン会で培われた経験豊富なスタッフも心強い。「多くの人にとって生きる力を育てる、そしてつなげる場所に」というMUROYAの願いが実感できる施設であった。

〔鋪田委員〕

MUROYAカフェでは、作業スキルもさることながら、コミュニケーション能力を高めることに重きを置いている。働くことが訓練となり、居場所となり、生きる力になる場所を目指している。

まかないボランティア制度については、さまざまな濃淡で運営に関わることができるため、多様な人材が施設に関わりやすい環境となっている。運営法人が掲げる、福祉の関係人口を増やすことにつながり、他の福祉法人でも、地域ぐるみで共生社会を作るために、積極的に取り組む必要があると感じた。

〔高田重信委員〕

お店に一步入ってとても清々しい感じを受けました。MUROYAの立ち上げの経緯や運営方針についてお聞きし、その一端が分かったような気がしました。食事も美味しく、料理を盛られた器も清潔感があり味を引き立てていました。スタッフの皆さんのおもてなしもとても心地よかったです。コンセプトにある「食べることは生きること。」を実感しました。

アルペン会の総合的な運営方針、コンセプト等を噛み砕いて説明していただき、アルペン会の目指す福祉社会、まちづくり、ひとづくりに対する熱い思いとその実現に向けて、さまざまな知見やアイデアを駆使して事業に取り組まれていることを知りました。説明を受け、「一つの福祉社会のあり方」の方向性が明確に示されていることにとても感銘を受けました。

アルペンリハビリテーション病院

(1) 視察事項

回復期リハビリテーション病院における取組みについて

(2) 視察の目的

平成31年4月に開院した富山まちなか病院においては、富山市民病院との機能分化を掲げ、回復期医療や在宅期医療を今後担っていくこととしている。

そこで、回復期リハビリテーション病院であるアルペンリハビリテーション病院を視察し、今後の病院事業の参考とするもの。

(3) 取組みの概要

アルペンリハビリテーション病院は2008年6月に開設された回復期リハビリテーション病院である。右利き用・左利き用の病床を各30床ずつ備え、計60床の病室はすべてトイレと洗面所を完備した個室となっている。病室表記を「〇〇通り〇丁目〇番地」、イベントを行う広場も「きつときと広場」などとそれぞれに名前をつけることで、実生活に戻る際の足掛かりとなるよう工夫されている。

リハビリは1コマ20分で1日最大9コマ、計3時間行われている。作業療法や言語聴覚療法などを実施し、特に理学療法ではロボット脚と吊具を装着し、自身の歩行がリアルタイムで表示される最新機器を導入している。

(4) 所感

〔高田真里委員長〕

この病院では、作業療法、理学療法、言語聴覚療法を行い、もう一度「ただいま」と元気に帰宅することに目標がある。院内はすべて個室で、部屋の中に洗面所やお手洗いも完備され、入浴も自宅同様の個浴となっている。国内でも先進的な事例となる最新ロボットを使った歩行訓練サポートもあり、その成果も大きい。また、通所リハビリ施設も併設されており、日々の生活を楽しみながら取り組んでいる様子がうかがえた。

これからの高齢社会にますます需要が増える回復期病院の理想的姿でもあり、富山まちなか病院にも採用するとよい仕組みが多いと感じた。

〔泉副委員長〕

アルペンリハビリテーション病院では、下肢麻痺等により歩行が不自由な患者に、ロボット脚や吊具を装着して、リアルタイムで自身の姿を確認するとともに、歩行の映像録画や歩行指標モニターを備えた最新機器が印象に残った。映像や指標を医師と一緒に確認し、体重のかけ方や体の使い方をデータから分析・修正し、次なる訓練では確実にステップアップできるだろうと感じた。

また、入院病床60床のうち、右利き、左利き仕様の部屋を各30室整備しており、日常生活の動作の中でもリハビリを進行させる機能に驚いた。

〔松井委員〕

アルペンリハビリテーション病院は、1日でも早く自宅に戻れることを目的とした入院施設で、75日間を目安に集中的にリハビリを行う施設であった。

20分を1コマとしたリハビリを1日最大9コマ、計3時間でプログラムを行い、家で暮らすために必要な訓練を行っており、入浴に関しても機械浴ではなく一般家庭と同じお風呂での入浴訓練を行っていた。

さらに、リハビリテーション支援ロボットを活用し、経験からではなく、科学的見地から分析し、歩行するために必要なリハビリを的確に取り組んでいた。

いかに自宅で暮らせるように回復できるかが課題だと考える。

〔金井委員〕

リハビリテーション病院のイメージとしては、2～3カ月の期間に、主に身体的に失われた機能の回復（歩行など）を目的としていると考えていました。私の母が大腿骨の手術をした際のリハビリテーション病院（公立病院）の目的は、歩行の練習でした。

病床の関係もあるのかもしれませんが、アルペンリハビリテーション病院では、退院後の生活機能の回復を考えて、個々に適応した、心のケアを含めた支援をしていることに驚きました。

長寿社会にとっては、入退院の繰り返しをしない治療や看護ケアが必要だと感じさせられました。

〔大島委員〕

アルペン会として、新しい社会課題に対する施設を作ることが使命であるとして、事業展開をされている。成程、この病院を視察して納得できる。

新しい高額な医療機器の導入と利用実績もさることながら、自分の力で早く回復させて、1日でも早い退院を目指すという、利用者に対するスタッフの意気込みが感じられた。また、そのための工夫が随所にある。

施設も、利用者の立場に立った設計であり、明るくて広い廊下や、利き手により左右が逆になっている部屋、個室の風呂等、細かい配慮が行き届いていると感じた。

〔松尾委員〕

入院から退院まで、患者の状態に応じたリハビリテーションを提供している。

もう一度家で暮らせるように、患者の障害等の程度に合った移動の自立を目指し、病棟では、お部屋のトイレや個浴で日々練習できる体制になっており、洗面、更衣、食事や排泄など、毎日の暮らしに必要な動作の練習も行っている。また、病院のいたるところで、暮らしに必要な練習をしていただく工夫がなされており、日々の生活や趣味を楽しむための空間づくりもされていた。最先端のリハビリ体制が整っており、今後も期待したい。

〔橋本委員〕

この病院の特徴は、1日の行動をすべてリハビリにつなげていこうというものだ。毎日3時間のリハビリ以外にも、病院のいたるところで暮らしに必要な練習が行われる。

ここでも「つなぐ」がキーワードになる。生きる力をつないでいくために、さまざまな人たちが専門分野の垣根を越えて手をつなぎ、お互いの知識や経験を活かしあうことを実践している。医師や看護師はもちろん、医療ソーシャルワーカーやケアワーカー、栄養士等々、患者さん1人のためにみんながひとつになる。リハビリの重要性、必要性について改めて考えさせられた。

〔鋪田委員〕

患者自身が、専門家だけに任せず、自らがリハビリに関わっている。また、通常別々の専用室に分かれている理学療法、作業療法、言語聴覚療法のスペースがオープンになっており、一連のリハビリ全てが日常生活の延長として自然に行えるような工夫が伺われた。

併設する通所リハビリ施設では、通所者が自分の役割として自主的に清掃活動を行えるなど、通所者自身に役割（生きがい）を持ってもらえる工夫があり、他の福祉施策でも生かせる重要な理念だと感じた。

〔高田重信委員〕

アルペンリハビリレッジのパンフレットには「生きる力をつないでいく」、そしてアルペン会グループのパンフレットの表紙にも「生きる力を育む」とあります。私が富山市市PTA連絡協議会会長るとき、学校週5日制導入の時期で、「生きる力」をテーマにPTA活動を推進した経緯もあり、そのコンセプトにとっても共感を覚えました。

そうしたコンセプトの下、患者さんが1日でも早く家に帰ることを目標にビレッジ（村）という発想の中、施設の運営等が行われていることがとても新鮮でした。施設は明るく開放的でゆったりとした広さがあり、「患者さんにとって心にゆとりが生まれるのでは」と感じとれる空間でした。庭にはヤギもいて、その環境にぴったりとはまっていました。

治療設備は、最先端の機器が導入されており、患者さん一人一人の状態に応じてリハビリのプログラムが実施され、機能の改善が図られているとのことでした。最新の科学技術を生かし、リハビリの効率的な治療法が確立されることが大いに期待できるもので、超高齢化社会を支える重要なファクターに今後なるものと考えます。

(1) 視察事項

高齢者施設と保育施設および放課後デイサービスの一体化による効果について

(2) 視察の目的

近年保育ニーズは高まっていく一方、高齢者施設や放課後デイサービスの不足が指摘されている。また、核家族化により、多世代交流が困難となっている現状を踏まえ、高齢者施設と保育施設および放課後デイサービスを一体化しているあしたねの森を視察し、その効果を検討するもの。

(3) 取組みの概要

あしたねの森では、特別養護老人ホーム等の高齢者施設と、幼保連携型認定こども園「ガンバ村保育園」や学童保育といった保育施設、放課後デイサービスが併設されている。

各施設からほかの施設の様子が見える設計となっていることで、どのようなことを行っているのか確認でき、子どもや高齢者の行動がそれぞれに影響を与えている。

保育園ではヨコミネ式教育法を取り入れ、子どもたちの持つポテンシャルをみずから開花させるよう努めていることや、高齢者施設の利用者と定期的に交流する機会をつくることで、多世代交流を実現させていることが大きな特徴である。

高齢者施設において、デイサービスでは独自通貨「Yume（ユーメ）」を導入しており、活動を行うことで稼いだり、入浴や食事、娯楽などで消費したりすることで、管理能力を養い認知症予防につなげている。

(4) 所感

〔高田真里委員長〕

保育園、介護施設、学童保育、放課後等デイサービス施設が同じ敷地で運営され、多世代型交流が日常的に行われている。アルペン会の共通理念として、「生きるチカラ」があり、それは幼い子どものときから身につけてあげたいという想いを感じた。子どもの身体的な成長だけではなく、小さな成功体験から得られる自己肯定感や、高齢者との交流から得られる他者への思いやりや倫理観など、心の栄養にも大きく寄与するものである。

すべてを通じて、人とのつながりを生かし、どの世代であっても一人一人が輝ける社会を実現していく、このことを実現しているものであり、SDGsにつながると確信している。

〔泉副委員長〕

あしたねの森の特筆すべきことは、こども園とデイケアサービスを同じエリアに隣接設置したことで、幼児と高齢者のお互いのプライバシーを維持しながらも、合同行事や

小規模な催しが臨機応変に実施でき、適度な交流により、互いの醸成に貢献しあえる施設として初めから考案されていた点にあると考える。

移動手段を必要とせず、高齢者を思いやる気持ちを育み、若い園児から癒しを受けられる、いわゆる昔ながらの家族制度の場を提供していると感じた。ただ、園児の声が騒音だと近隣住民から苦情を受けている現状には愕然とさせられた。

〔松井委員〕

あしたねの森は同じ敷地内に児童施設と高齢者施設が併設してあった。

ガンバ村保育園ではヨコミネ式教育法という特色ある保育を行い、高齢者施設内では金銭感覚を忘れないために「ユーメ」という施設内通貨を使用したり、家具などをあえて自宅と同じように配置したりするなど、工夫を凝らしていた。

何より、子どもたちと高齢者が施設を通じて日常的に交流できる取組みを行っており、核家族化や高齢者のみの家庭が増えている状況を見ると、多世代交流ができる貴重な場だと感じる。

本市においても、多世代交流が行える環境づくりを考えていく必要があると考える。

〔金井委員〕

幼児保育を含めた保育所や学童保育、障害者保育、放課後健全育成事業（子ども会）が一カ所に集合していることに驚きました。この施設の第一印象は、名前の通り「森」の中だと思いました。

民間事業所の子ども会の見学は私にとって初めてのことでしたが、一番驚いたことは個々の机があったことでした。宿題や自主的な学習をしたいときには大変有意義なものであると感じました。

その他にも、年少クラスを入口からより遠くに置き、年長さんの毎日の活動を「見る」ことで成長を促すなど、工夫を凝らした保育に感心させられました。

〔大島委員〕

子どもたちの潜在能力を引き出すヨコミネ式教育法については、別の施設を見た際もその効果を実感していた。今回の視察当日、避難訓練が偶然あったが、実に整然と行動している姿を見て感心した。その子どもたちが元気に活動する姿を間近に見れば、高齢者の方々も生きる力が湧いてくると思う。

何か目的を持って生きていくことはとても重要なことである。デイサービスでは施設内通貨「Y u m e（ユーメ）」を導入することにより、社会参加の再開と、管理能力を養い認知症予防として活用していることに大変興味深いものがあつた。

〔松尾委員〕

あしたねの森には、敷地内に高齢者施設と児童施設が併設しており、日常的に交流している。子どもたちとの関わりは、高齢者施設利用者が元気に暮らすための活力となり、子どもたちも「人生の先輩」から色々な経験や教訓を教わることができる機会があふれ

ていた。こうした多世代交流を通して「笑いあい、学びあい、支えあう」地域づくりを目指すとしており、多世代交流の視点は重要であり、今後の地域づくりに生かすべきと考える。

〔橋本委員〕

あしたねの森では多世代交流が日常的に行われている。敷地内に高齢者施設と児童施設が併設しているのだ。高齢者にとって子どもたちとの関わりは元気に暮らすための活力になり、子どもたちは「人生の先輩」からいろいろな経験や教訓を教わることができるという。

園庭で遊ぶ子どもたちを見ていて気になることを質問した。危険だと思えるところがあったのだ。危険を排除するのではなく、危険だと認識した上で遊ぶとの答え。日常生活の中で子どもたちの生きる力を育むことは重要だ。今後の幼児教育を考える上で保護者の意識改革も必要であろう。

〔鋪田委員〕

横峯メソッドを取り入れた保育施設（認定こども園）、学童保育、放課後デイサービス、デイサービス施設が一体となっており、介護、障害者、教育・子育て、高齢者福祉などについて、それぞれの得意領域を生かして運営されている。

今回視察した全ての施設と運営法人の基本理念に一貫した福祉に対する理念だと感じたと同時に、これが制度として取り組めるかどうかについても検討が必要である。

〔高田重信委員〕

「明日の種を育みたい」というコンセプトの下に、幼保連携型認定こども園、学童保育、放課後等デイサービス、特別養護老人ホーム、ショートステイ、デイサービスの施設が同じ敷地内に整備され、子どもたちの生きる力が育つような特色あるプログラムや、高齢者との交流等のソフト面、広い廊下やグラウンド等のハード面において、さまざまな工夫がなされていることに感銘しました。あわせて、情熱を持って子どもたちに接しておられるスタッフの皆さんをリスペクトします。

子どもたちの元気で明るい表情を見ながら、子どもたちが健全に育つ環境整備の推進をもっと図るべきと強く感じました。

令和元年11月8日（金） MUROYA



アルペンリハビリテーション病院



あしたねの森

